

かゝる素直かありかたはたやあ、あつたらは道く

一七世身ふ

長岡の斯ういふ市原に廻り来り様にと宅に
 ちり廻りて来れぬのびりから餘定と變一、わ
 けにゆかか、古奈温泉の入口に異れちと別
 れ、~~私~~私にちはたは其の道に歩きたりた。
 今米の御明寺入道時頼の墓のあり、御明寺と
 一、ふた、いお寺がありあり。お墓に詣つて、甚
 尊の御つた石の上の休才ふから、おはるさま
 や宛たちと相午に録り木の嶺ふどをしました。
 このお墓のありあり、この階近一帶には鎌倉
 時代の古跡が沢山のありあり。
 長岡には行そつけのちにかし屋といふに寄
 りました。養正中も駒込のちのちあり、
 こゝに今迄は年寄や子供がたのびあかり、
 賑はしかり、親切にたりたりと遊れました。
 平常はよく飲助連中とのヤ行しとのびあかり
 長岡の意せり、御無きにしろあらしあふの
 びあ、とにかくおはるさま、おや、いつの
 了にかあつかりあはるさま、おはるさま、
 いち、おはるさま、おはるさま、おはるさま、
 した。おはるさま、おはるさま、おはるさま、
 した。おはるさま、おはるさま、おはるさま、

後

年の別村と外に温泉といふ水のながいのがあり

午の別荘に外に温泉といふ池のがあるの
 かなぬ おはアをまよその別荘には二層ほど
 行つたところがかかりなりかきるべし。長閑な
 はずり滑らかなおのが持色がある。それが悉く
 おにひにみしやうた。それと着いてかひ夕食ま
 べに二層に入らぬやうた。一つは強ねちり
~~おは~~ せがま

夕食には精及御馳走とリ寄せました。お
 しきのにはしげよふお前持打し着込ひは
 さいかゝいおとーおひりまおすした。それ

乙女中にけわむと意慮あせし。お徳利を
 いの七瓶本が取寄せしおひりて自分
 ちかひの自ずか飲申あけアたまひに皆め
 弱くおられぬやうた。もう精一合を飲
 れたかとおれぬとあはなが強かあいの
 坪谷の五外様は唱はそれた人とし思はれ
 多岐の橋を越し。自宅のゴた／＼した中
 び飲すれよ／＼おひりといと見え。則ち
 持たせろ／＼酔ゆれまうた。それと着
 ちかひ酔ひました。子供はあはれを頼
 ちかひ

常より

おひり

東京文房堂製

東京文房堂製

とまねの解いましと
 子供れちけ
 東京文房堂製
 およこ

現

荒とゞゴフニいしとある様に、いろくふ
 こととしとたゞてあり。七つに十歳いあが
 今日の意足てあかあかたか長い間かつ
 ことたゞてあかあか。食後、昔の昔の子供のため
 に十ヨコレートクリムと一代の買ひ、代價一
 円を挿れおあと、おつた。それだけ一円付
 え、これ、おぼしやえに北一つたべとせ
 見ぬ、あどららるる。子供たちには笑はれおそれ
 た。床は三つ、おあつたりと眠りありた。
 翌朝、急事の時、和衣一つ、の相談を持ち出
 しました。此處に二のまゝと一晩泊つて中
 し、か、おとせ、甲子をまゝと一昨日休ませ、
 見ぬ、おとせ、これと他の愛つた湯泉へ行
 った。見、か、おとせ、か、い、と、い、ふ、の、か、り、
 たち、お無、論、後、者、に、替、成、お、ぼ、ろ、ま、ご、か、
 折角虫と来たのたか、一個所、おぼろ、ま、ご、い、所、へ
 連れ、行、つ、つ、世、界、の、復、い、と、い、ふ、元、家、お、の、び、早、業、
 それに、一、決、食、後、お、後、より、と、と、遠、方、ま、ご、敬、
 歩、し、つ、伊、豆、を、却、り、出、す、山、お、ど、ま、ご、行、つ、つ
 見、ま、ご、た、伊、豆、に、お、伊、豆、を、と、云、つ、つ、
 此、山、石、村

東京文房堂製

8.11

と、産、し、ま、ご、か、
 こと、に、こ、の、附、近、か、い、出、し、
 石、
 け

見たりた。伊豆には伊豆を云つては山石村

を流しすちか、ここの附近から出た。夏は
夏は白い地色の中に淡い青味を合んべ
の地より北の山をこれの山と云ふ。

十時頃、山を出た。昨日の首と十時頃

どあといつて、古奈温泉のふにがし、
上り、晝食の用意を頼んで、其処から

下は敷田、それの所謂千人風呂といふの

出懸けす。行つて見れば千人風呂の行か

に、大なる浴槽といふの北ありのどあ、又

と北の根の設けあり、野天湯、いづれは

コンクリート園と云ふ園あり、

大なる浴槽が出来るのどせ、
の世田、それの湯に湯に湯と湯が甚

いれ、その湯、年をわけ、見れば湯屋、下

浴び、誰い入浴自由といふので、早

知は着物を脱ぎました。そして仲い、と中

に、入りあが、娘たちを促しました。が、

か、遠つて、おの、二人と北の湯、物

笑ひを、この湯、容易に入らうと、

ん、い、し、た、が、和、が、を、あ、と、

泳いで見せたり、あ、と、あ、と、

泳いで見せたり、あ、と、あ、と、

二人、
東京文房堂製

泳いで見せたりふどしおと。 たうとうおは

二人 肩を背り 見せたりふどしおと。 東京文房堂製

ねえんのが先がおはアアオの側ル馳けつけ
 二着御を脱いせ世界い。 そのおはねえんを和が
 おんぶして泳いだりしておと今幾は姉さん
 のふれたまりかぬこ入つて来たした。 深さが
 丁度二人の乳や肩のあたりまでありおのび
 赤か〜一人おちびは歩行もおつかあとい
 ぶお様〜した。 おはアアオ来たうと〜おしま
 いまど着物の道ん〜した。 日は真上かり
 曇り うらむ 湯槽の周囲には 見ごとお茶室の 湯
 柿の木が 湯槽の周囲には 湯槽の周囲には 見ごとお茶室の 湯
 はけつと用白紙〜思ひの外の長湯をし〜其処
 を思ました。 宿屋に帰れば其処は湯と湯
 とを勧められす〜たか双すとは断つて早速書
 食。 やか〜俵を呼んで長湯飲に思ました。
 駅 かの電車。 その終点の大仁駅下車。 馬車
 を一台借り切つて 船 湯泉といふん向いす
 た。 志奈びの晝食の時。 何処か 極く静か 静か
 へ行つて見たいとのおはアアオの 赤い 赤い記憶を呼い
 のび、 あね〜れと考へた末。 昔の記憶を呼い
 出し〜この船原にすめたのびした。 此處には

東京文房堂製

六七年前一度来た事があり。 ツリ遊先と湯が

西戸を襖
しきつゝし
もこの襖と
いふ由直とい
あまりのお
手をも

見よかに
にせつほさうと建物
と總体は四階か五階かしかぶい部屋敷がたう
ふもかつゝおと唯だ行風直舞の一定かけがあい
このりやあ止むふくふれへ入らぬは入り
すしぬが、和はもつかりしこ急い付
御中もあうませんじら。か、
に急つかれぬか、い、よ、い、よ、これがい
このめ、結構と早速火鉢の側は窓つて火
草入おど取り出し、流られす、

物置

皮肉にも谷一東のしに和の古馴染の
大きき湯元の市産が見えぬおす。に、
た山の根のかつしりしれ、
か、
のびあ、
たとい思ひ、
つれ所を、
うし、
つねと、
にま、

東京文房堂製

おば、
あ、
あ、

東京文房堂製

おはアそちに重々お詫いせいでいまして。おは
アそまけすた却つ〜私に氣の毒さうに、いゝ
のよ、いゝ、e" = びね正、斯くは所のうがめ
たしおとかに水却つて落着け〜いゝのよか
つし中いれすた。いゝか
とにかくお湯は体ありすのび〜浴し、私
とリあ一方遊仙の川流に走つ〜鐘鐘話おどを買
つて来たすた。日役は十二日終つたに、今夜
は六日六日終つたに、はすかおアて
また、姉妹知と。

翌朝北赤た極上ろか日知べしを、ほんとし
に難加い二とべしを。朝日のいつばいに射し
込め御堂に、昨日の夕方の車をど忘れを急持
どめつたりとこめすた。宿の主人が挨拶
に来すた。いかにもお親りしい老人に
お二人は夜の風平氣の毒は縁に北思思すた。
君と知、信、まぶとの窓南窓には昔人の様
いしを。二つ三つ世階越えしを後、私はその
老人に尋ねすた。此處の山城山城は行くと大変近近い様
に聞い。

吉奈温泉へ

東京文房堂製

おたが、そんな路かありすあか

東京文房堂製

吉奈湯泉へ

14

おれが、そんな路がありすあか
 ありすあとし、ソレ、あの：：：
 と、谷向うの山腹を指し、
 あれは見えすあがり、その路、
 まい、十、六、町、位の、もの、で、せ、
 路は、ど、ち、で、あ、二、の、人、た、ち、に、
 歩、け、ま、あ、と、し、あ、子、供、様、に、
 位、の、で、い、い、ま、さ、さ、さ、さ、
 居、様、に、い、い、か、い、い、い、い、
 と、二、三、か、い、い、い、い、
 例、の、
 眼、を、細、く、し、て、見、れ、あ、か、り、
 山、路、の、ま、が、痺、に、ま、け、ま、せ、ん、
 と、い、は、れ、ま、し、た、
 人、の、
 耳、を、
 か、こ、ま、ん、出、階、下、に、降、り、
 ね、と、お、か、り、ま、ん、
 和、は、
 其、の、あ、と、を、見、送、り、

其のあとを見送り

山を、
 あ、の、山、を、世、え、と、見、ま、せ、ん、か、
 此

15

うかこい / 東京文房堂製

大駭せり。早速袖と端折之文の相識
 をたゝお申のおとろくを休ませ走り出し
 徳相を四男の素のやいの用意を整へてその初
 を出せられた。子傷の學校を休むのせは和生
 多き事さう大したことの考へておせせし
 した。備前のふまれとか綴長は返りとか云つた
 めの代りに。和生機会がある時うしつて
 を休ませても幼い頃の「よき記憶」を彼等の
 心に刻みつけたと思はれたい。戸部をとりて
 下のいふ。びりかしの先達も長男をあんふに
 月あすり休ませても中国九州と連れと歩い
 月あすり休ませても中国九州と連れと歩い
 山は雪外に踏はさうとていふたが、要
 急重を急せしむ。何しれおれいといふ
 かのかか〜と日か眠りつけまのびりし
 つ〜行くともし大愛お汗びあ。姉の姉妹は定
 心をぬい。肌をぬいし。やがて和の作つて
 やつた可愛いの杖をついて二人ひつしとく
 つ着いて来たつ〜ゆしりびあ。あか〜元氣
 しのびあ。それより北の山のはおはアま

東京文房堂製

の意者ふことびす。おんほ田舎の人び / 山に

山に

の運者ふとこいす。ふとほ田舎の人び。山に
 は馴れこぬと白燻えれぬせよ。身は何と
 云つては七十七の~~歳~~新心せよ。私の気が
 かりけり張り子供たちよりこの老人の上にあ
 ったの。すか、どうして、一寸した川原
 夏野のキ荷物を私が持たるとしては、
 北河をぬ有様かのである。
 北河をぬ有様かのである。
 立止つて北河伸びせして北河中を自分
 であ。それを見て待つ二人の子供は、
 様ふ不流を茂草の上にあつて足おけ
 休すま。山の中腹から流は茂草の
 入りま。た。多くは樫の葉草。それか
 山。山踏の真紅な花とこり、
 其處のかわつて来す。
 日 本 之 語 彙 一 四
 と 母 の 口 ぶ の 以 應 へ
 日 本 之 語 彙 一 四

東京文房堂製

東京文房堂製

未し身玉と
 又すか
 びし
 あり
 あり

の
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

18

17

と味も物狂声を足げあか指どしすあり角
 を見すありとふしほじ縹麗堂士の大山が紺
 青色の岫にしつきり白く管を立つておりので
 如
 田
 才、
 才、
 ね
 ね
 こ
 ね
 りん
 しい
 り
 野
 幸
 上
 れ
 か
 出
 い
 毎
 二
 七
 今

東京文房堂製

15

の郡の名を無い山で摘すと水流石のあは

東京文房堂製

14

と今年断りして思ひかけおく伊豆の国伊田

の郡の名を無^い山で摘すと休^いのあは^り
 さまに北^の思^ひのかけあいことた^りあ^らせ^り。

休^ひのつ^り走^りつ、^の味^ひの^二の^けつ^して、^十五

六^の町^あ、その^の峠^を一^の時^の上^かつ^つし^て漸^しむ

越^し終^へす^した。和^は何^がか和^まび^か子^何に

あ^つて、^の御^の野^原を、^斯く^して^思ふ^があ^り

様^あが^らし^てあ^りま^せん^にし^た。子^何に^あは

無^論の^二の^一瘦^せか^らい^かは^りあ^らま^のか^勢

ま^じし^とく^に汗^はん^ご夏^あの^二の^一あ^らは^つて^あら^の

あ^ら。

日^マア^来た^らば、早^急か^湯に^更ひ^んで^上つ

二^日の^かた^まに^今日^はう^んと^湯走^をた

べ^きせ^うの^二の^一前^を

さ^う早^急な^つけ^あら^しの^湯泉^市に

ゆ^り着^{いた}ので^あら、此^家は^あか^く大^きお^宿

屋^で、内^湯だ^けれ^三日^の所^に湯^りに^あま^り。

お^まに^東京^者は^かり^せ窓^にし^てあ^らの^二の^一料

理^れを^疑つ^てあ^ら。

日^しげ^よ、お^前は^まし^とあ^らに^取り^寄せ^て

あ^らし^てた^べき^しつ^りか^え。

どうしてたへきよつたりかえ

と、またお水言と食ひあから、サイカ、
 ビール、お燗と飲物とり、
 せ、銀汁の食つし、
 りきりた。おはアさまは子供に引つ張られ、
 其処で、
 こつりと休む、明日は沼津へ帰ります。
 甘茶、姉さん、
 終りす和と、
 まに和と、
 安心しと、
 此の様に、
 左様、
 郡御所、
 度々、

若山
水姉への手紙



本問文庫

文庫 14

A125